ミスティック☆マギカ　－母を訪ねて見滝原－

ガチムチアーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミスティック☆マギカ　ー母を訪ねて見滝原ー

【Ｎコード】
Ｎ９４３７Ｘ

【作者名】
ガチムチアーク

【あらすじ】
まどか☆マギカの世界に、ミスティックアークＥＤ後の主人公が生まれていたら。
というお話です。主人公は原作から男（レミール）のほうを選びました。
時間軸は本編とおりこ☆マギカを合わせたのを予定しています。
原作の人死にを抑えつつ、ちょっと切ない感じに仕上げたいと思っています。

ーあらすじー

鹿目まどかに絡みつく、膨大な数の因果。
それは、潜在魔力の急激な増加を伴う。
その不自然な魔力を感じ続けていた、女神の子レミール。
母に共通する『女神』の感覚を頼りに、日本へと渡る・・・。

プロローグ　―因果が呼ぶは女神の子―（前書き）

プロローグですので、まどマギキャラは出てきません。
ご注意ください。

プロローグ　ー因果が呼ぶは女神の子ー

分厚く空を覆う曇り空。
まだ肌寒い3月の風に吹かれた岬。
強い風の音と岩肌に波打つ音を背景音に、一人の少年が海の向こうを見据えていた。
鉄の籠手に革の具足と腰から下げた長剣、白のクロースを着込んだそれは、中世の冒険者を思わせる。
まるで輝きを放つような金髪。
女性と見間違えるほどの見目麗しい顔立ち。
首ほどで結わえた長い金髪が、風に踊り狂うのも気に留めず、翡翠の瞳が水平線の海を見据える。

「・・・やっぱりだ。たった数日で、格段に強くなってる」

少年は古ぼけた羊皮紙の地図を広げる。
すると、まるで見計らったかのようにポツポツと、雨粒が降り出した。
タイミングの悪さに、少年は軽く溜め息をつく。

「・・・まったく、間の悪い」

小さく吐き捨て、少年は振り返って駆け出す。
雨脚の強さに比例して、少年は駆けた足を速める。
田舎風景に構えた牧草地や麦畑でいそいそと雨宿りする人達に挨拶を交わし、髪を濡れそぼらせたあたりで、教会に辿り着く。
少年が教会のドアを開くと、教会の長椅子に寝そべった修道女が上体を起こした。

見た目こそ二十半ばほどの修道女で、顔つきを整えれば美人の部類に入るだろう。が、寝ぼけ眼とよだれを垂らしたその顔は、百年の恋も一瞬で冷めてしまうだらし無さだった。

「おはようさん、レミール」

「もう『こんにちは』ですよ、シスター・コルト」

呆れ顔でレミールが言うと、銀髪の頭を掻きむしってコルトは再び上体を長椅子に預けた。
教会に響くいびき声に、レミールは呆れたままで呟く。

「この人はいつ起きてるんだろう？　ま、今は好都合かな」

教会の階段、二階の居住まで駆け上がる。
薄暗い室内、ランプに火を灯す。
明るく、はっきり見渡せる室内には、電化製品の類は一切ない。
家具は全て年季の入った木製。
火を使う窯、山水を汲み上げる手動のポンプ。
テレビもラジオもなく、娯楽は本棚に敷き詰められたものだけだ。

「さて、と。早いうちに準備しとこう」

レミールはベッドの下に潜り込み、荷袋を引っ張り出す。
野営で使う小さめの調理器、干し肉に水筒、金貨の詰まった袋が所狭しと詰まっていた。

「日本でも、金が換金できればいいんだけど」

本棚から数冊を、更に持っていた羊皮紙の世界地図と方位磁石を荷

袋につっこむ。
無駄なく入った荷袋を見て満足気に頷く。
すると、木目の階段が軋む音が響く。
レミールが慌てて荷袋を戻すと、ふらふらとしたコルトが情けない声で言った。

「レミール～、メシ～」

「はいはい。適当に作るから、もう一眠りしてなよ」

「イエッサぁ～・・・ｚｚｚ」

「立ったまま寝ないでよ・・・」

雨音の響く室内に、コルトのいびきとレミールのため息が響いた。

ーーーーーーーーーー

雨雲は去り、月明かりが窓から差す。
台所を、エプロンを下げたレミールが無駄なく動く。
ランプの灯を頼り、ミートパイとシチューをテーブルに並べる。
と、その匂いに反応してか、コルトがようやく目を覚ました。

「・・・あれ？」

「こんばんわ、シスター・コルト」

こんばんわの部分に皮肉っぽい音程を加えるが、コルトは気付かず空いた腹をさする。

「食っていい？」

「シスター？」

強調して言ったレミールに、コルトはめんどくさそうに返す。

「はいはいわかってますって。主に感謝を～、いただきまーす！」

作法なんて飾りだと言わんばかりに、コルトが料理に食いつく。
いつものことだと慣れきったレミールも、深く気にせずに席に着く。

「主に感謝を、いただきます」

コルトと違い、しっかりと作法をこなす。
が、料理に手を運ぶ前に、レミールが言った。

「シスター・コルト。俺が拾われたのは、日本だったよね？」

「むぐ？　いきなりどしたんよ？　まぁ、質問にはＹＥＳと答えとこう」

「いや、ただ確認したかっただけだよ。けど、日本のどの辺りかは気になるけど、知らないかな？」

「さぁ？　当時、地方だった場所が都市開発進んで、今じゃ名前そのものが変わってるし。て言うか、当時の名前も覚えてないし」

「そっか。シスターは当時、船で日本に来たんだっけ？　東に行った港町から？」

「そうだけどさぁ、なんでそんな食い付くん？　あ、恋焦がれたぁ？」

「そんな性癖、当店では扱っておりません」

互いに冗談を交え、レミールは話を切り上げたい意として、食事に手をつけ始めた。

ーーーーーーーーーーー

翌日。

木々の葉に朝露が纏わる早朝。

荷袋と小盾（バックラー）を肩から背負い、舗装とは無縁の土の道を歩き進む。

ふと、レミールが振り返った。先には、今まで家として暮らしていた教会がある。

迷いを振り払うかのように、頭を振って歩を戻すと、よく見慣れた人物の顔があった。

「ハロー、不孝少年」

「シスターに孝行へと足る尊敬なんてありませんよ？」

「さも当然と言うなよ、可愛げない」

コルトはわざとらしく、拗ねたように頬を膨らませる。

「何時から、気付いてました？」「何で、言わなかった？」

重なる声、交わる瞳。

冗談交じりなど微塵もなく、続く沈黙の間に、風が吹き抜ける。

根負けしたのは、レミールだった。

「・・・言ったら、決意が鈍りそうだった」

「出生探し、か。よくもまぁ、そこまで溜め込んだもんだね」

「熊狩りって、結構儲かるんですよ」

「うわぁ、やりたくなーい。で、決意は鈍った？」

「残念ながら」

今度は冗談交じりのやり取り。
それを聞いたコルトは、混じりけ無く笑って、革袋を投げ渡す。
ずしりと重いその中身は、レミールの貯めこんだのと同じ程の金貨。
そして、真新しい日本地図。
その一点、丸で記された部分。その地名は、見滝原と記されていた。

「お前ってさ、変わってるっつーか大人びてるっていうか。昔っから、見た目に不相応だったよなぁ」

「実は前世持ちなんですよ。信じます？」

「救いを期待して信じます。救い以外は信じません」

「シスターってさ、俗っぽいっていうか現金っていうか。昔っから、見た目に不相応でしたよねぇ」

「ホント、可愛くない返し方するなぁ、この少年は」

言い合い終わって、互いに笑い合う。
と、レミールが静かに言った。

「ただ拾われた場所って言うなら、こんなに急がなかったんですけど。ここ数日、日本から感じる・・・魔力っていうのかな？　なんとなく、膨れ上がってる感じがするんです」

「膨れ上がってるねぇ・・・。表現にヤバめな気配しかないんだけど？」

レミールの話を、コルトは与太話と捨てること無く受け入れる。
内心嬉しくなりながらも、レミールは続ける。

「ただ、似てるんです。『母親』の感覚と・・・。いや、同一人物じゃなくて、同じ・・・種族の気配、かな？　でも、ひとつだけ。はっきりと言えます」

レミールは深呼吸をひとつ。
コルトは言葉を待つ。

「いてもたっても、いられなくなった」

コルトは、笑みをひとつ。
レミールの背に歩き並んで、一言。

「いってらっさい」

レミールは、振り返らず、力強く。

「行って、きます」

答え、歩き出す。
空を見ると、夜暗の後は形を潜めていた。

プロローグ　―因果が呼ぶは女神の子―（後書き）

はい、シスター・コルトはオリキャラです。
さすがに日本暮らしで、レミールって名前はありえなさそうでしたので。

プロローグ・見滝原　―女神の子と女神候補―（前書き）

ちょっと原作より手を加えています。（さやかや仁美の行動に）

プロローグ・見滝原　―女神の子と女神候補―

白黒の床、チェス盤を思わせる模様の廊下を、一人の少女が駆ける。
桜色の髪、赤いリボンで短めのツインテールに整えたそれが、駆けた衝撃で揺れる。
幼気のある顔は、前だけを見据えて走る。
が、その足が何かにつまずく。

「ひゃっ！　とっと！」

勢いをそがれた少女は、つまずいたものを見る。
それは、透き通るようなクリスタルをあしらったペンダントだった。

「・・・届けてあげないと」

少女はクリスタルを拾い上げ、制服のポケットにつっこむ。
クリーム色を生地とした制服のポケットは、思ったよりスペースがあった。
再び、少女の駆け出した先には、ひとつのドア。
決意を確かめるように、両手で力を込めて、ドアを開く。
目に飛び込む空は、暗雲の灰色。
巨大な大木を足場に、覗く目下は半壊した街並み。
そして、目前の空には虹色の魔方陣に包まれた、巨大な影。
巨大な歯車に、逆さから生える、青いドレスと口だけの顔をもった白い女性の巨人。
その巨人に、ビルの屋上から相対する影がひとつ。
後ろ首に結えた、輝くような金髪。
翡翠の双眼、女性のような顔立ち。

鉄の籠手に革の具足、白のクロースを着込み、その手には長剣を携えた少年だった。
少年が何かをつぶやくと、巨人の周りに炎が現れる。
炎は紅蓮の空気となって流れ、循環し、巨大な灼熱の大嵐となる。

「すごい・・・」

少女は自然と呟く。
これなら、白い逆さの巨人も無事では済まない。

「無駄だよ。彼の力じゃ倒せない」

突如、少女に向いた言葉。
発したのは、白い獣。
イタチに似た体に、猫に似た頭。その頭からは、長い耳が垂れた生物。
そして、言葉は現実となって、少女の目に映る。
ようやく止まった炎の嵐から覗かせた巨人の姿には、傷ひとつなかった。

「うそ・・・」

まるで心臓を殴られたようなショック。
そんな少女を、巨人は嘲笑い、見せしめのように、魔方陣から無数の光を放つ。
虹色の破壊を、少年は最小の動きで、くぐり、転がり、飛び避ける。
だが、飛び散った破片が少年の動きを妨げる。
その一瞬、向かう光に反応出来なかった。
直撃だけは避けたが、衝撃でビルの端まで吹き飛ばされる。
何とか落下せずにすんだ少年に、少女は安堵の息を吐く。

巨人は、そんな少年の姿を嘲笑っているのか、笑い声を響かせたまま、何もしない。

「そんな・・・。こんなのって、ないよ・・・！」

「これは当然の結果だよ、まどか」

白い獣が、少女に向かって言う。

「いくら魔法が使えても、彼は人間だ。奇跡を糧に、エントロピーを凌駕した魔法少女と比べれば、彼はあまりにも非力だ。だというのに、魔女との戦いに加わってきた。これはその代償。言わば、然るべき罰なんだよ？」

楽しげに話す、白い獣の声を、まどかは聞きたくなかった。
少年が立ち上がろうとすると、巨人の笑い声が止まっていることに気付く。
まどかは、咄嗟に動く。
少年に危機を知らせようと。だが、遅い。
巨人から見れば、それは牛歩にも等しい。
魔方陣から放つ、一閃の光。
少年の咄嗟に構えた剣身を、無力と罵るようにへし折る。
その光は、折れた剣を砕き、少年の胸を貫いた。

「ッ！！」

まどかの息が止まる。
信じたくないという意思を、目に映る現実がはねのける。
少年の体が、力なく、支えのない空の地面に倒れかける。
と、まどかの意識はそこで途絶えた。

ーーーーーーーーーー

少女らしく、沢山のぬいぐるみの並ぶ部屋。
まどかの意識は、ベッドの上で覚める。
抱きまくら代わりのぬいぐるみごと、上体を起こして、ため息混じりに一言。

「はぁ・・・夢オチぃ・・・？」

ーーーーーーーーーー

「いってきまーす！」

口に食べかけのパンをくわえ、レンガの道を駆け出す。
道が木々に挟まれたところまで来て、気付いたように呟く。

「さやかちゃんは日直、仁美ちゃんは海外で社交界かぁ・・・」

少し寂し気に、木漏れ日差し込むレンガ道を歩く。
突然、揺れた茂みから黒猫が飛び出す。
まどかの目が、寂しさを吹き飛ばすように輝いた。

「エイミー！」

「にゃ～」

「よしよし、おいでー」

飛び出した黒猫は、まどかの差し出した手に駆け寄る。

抱き上げると、エイミーが何かを加えていた。
それは、透き通るようなクリスタルをあしらったペンダント。
それは、まどかの夢に出て来たものと瓜二つだった。
プレゼントと言っているのか、エイミーはまどかにペンダントを渡す。

「なんで、夢の・・・」

「ああ、やっと見つけた」

エイミーが飛び出した茂みから、女性のような声。
覗かせたのは、後ろ首に結わえた輝くような金髪。
声に違わぬ、見目麗しい女性のような顔立ちと翡翠の双眼。
その姿は、まどかの夢に出た少年を、そのまま映し出したそれ。
唯一の違いは、白地の学生服だけだ。
学生服を除けば、女性にしか見えない容姿に。そして、夢と変わらぬ姿に、まどかは惚けながら呟いた。

「綺麗・・・」

「えっと、面と向かうと照れるかな・・・」

「あ、ご、ごめんなさい！」

真っ赤になって、思い切り頭を下げる。

「あの、このペンダントって・・・」

「ああ。落としたところを、その子に拾われてね。すばしっこくて、追いかけるのが精一杯だったんだ。君のおかげだよ、ありがとう」

「い、いえ、ど、どういたしまして」

ぎこちなく、ペンダントを手渡す。
受け取りに手が触れた瞬間、少年の表情が変わった。
驚いたような顔に、まどかはつい不安を抱く。

「あ、あの、どこか壊れたりと、か・・・？」

「いや、ペンダントの事じゃないんだ。ただ、君が俺の知人によく似た感じがしたからさ。・・・そうだな」

少し考え、少年はまどかに手を差し出す。
握手を求めるそれだが、緊張気味のまどかは、戸惑ってしまう。

「俺は、レミール。レミール・フィンガーチップス。今日から見滝原中学校に通う留学生だ。これもなにかの縁だろうし、友人になってくれないか？」

「あ、えっと、こ、こちらこそ・・・」「ちょっと待った」

遮りの言葉に固まるまどか。
レミールは困ったように言う。

「せっかく友人になるんだ。敬語も緊張も無しにしてほしい。どうだろうか？」

「あ・・・」

まどかは、気付いたように深呼吸を一つ。

そして、レミールの手を握り返した。

「私、鹿目まどか。この子はエイミー。見滝原中学校の二年生だよ。・・・よろしく、レミール君」

「ああ、こちらこそ、まどか。ファーストネームでいいかな？」

「うん。外国だと、名前で呼び合うんだよね？」

「ああ。エイミーはまどかの飼い猫？　首輪してるみたいだし」

「えへへ、実は違うの。よその飼い猫だと思うけど、私も詳しくは知らないの」

「へぇ、飼い主以外に懐く猫も珍しいね」

「私も猫好きだから、つい面倒見ちゃうんだ。・・・っと、そろそろ歩かないと遅刻しちゃう」

言って、まどかは抱き上げたエイミーを下ろす。

「えへへ、またね」

「エイミー、君とも友人。いや、友猫かな？　まぁ、よろしくな」

「にゃ～」

挨拶代わりに一つ鳴き、茂みに戻っていく。

「レミール君、行こっか？」

「ああ。実は、まどか友人になってくれて安心してるんだ」

「どうして？」

「学校の場所が分からなくてさ」

「あはは、そうだったんだ」

他愛もない話で、木漏れ日レンガの道を歩いていった。

1，friendly&unfriendly

見滝原中学校の制服を着た少年少女の喧騒が広がる、街中の通学路。その中で、喧騒の薄い部分があった。
それは、歩くレミールとまどかを中心に、形成していた。

「おい見ろよ。金髪美女、いや美少女だぞ」「いや、男子制服だから男じゃね？」「あれで男は無いでしょ。きっと男装ファッションよ」「やっぱ外人はレベルが違うなー」

好き勝手に響く話声に、レミールは苦笑いを浮かべる。

「まどか、聞きたいことがあるんだ」

「えっと、なにかな？」

「なんだか、ものすごい視線が集まってるんだけど・・・」

「それは・・・やっぱり、レミール君綺麗だし」

「綺麗、ね。・・・なんか、複雑だな」

「でも、やっぱりレミール君って、美人って言葉が似合うよ。女の私だって、ちょっと嫉妬するくらい綺麗なんだもん。顔もそうだけど、そこまで綺麗な髪の人も多くないよ」

世辞など微塵も無い感想を述べられ、レミールは照れ顔をそらす。

「・・・とりあえず、俺の容姿から離れよう。これ以上言われたら、

恥ずかしさに茹る」

「あはは・・・」

レミールに言われたとおりに、まどかは何か別の話題を探す。
と、まどかの目に留まったのは、レミールがカバンと共に持ち歩いている長物。
布袋にくるまれたそれが、まどかの好奇心をくすぐった。

「じゃあ、レミール君が持ってるそれって？」

「あ、やっぱりこれを聞いてくるか」

「聞いちゃまずかったかな？」

「気になるのは仕方ないさ。ただ、大事なものだから持っておきたかったんだ。それに、友人への隠し事も控えたいしね。その代わり、内緒にしてくれよ？」

「う、うん・・・！」

固唾を飲むまどかにしか見えないように、布袋をひも解く。
覗かせたのは、長剣の鍔。
軽く鞘から抜いて、刀身を見せる。

「わ・・・！」

「日本じゃ、珍しい代物でしょ？」

「で、でも、大丈夫なの？　銃刀法とか・・・」

「問題があったら、検問に押収済みだよ」
おどけるように、レミールはカードを見せる。
文字こそ英語だが、レミールの顔写真に免許証のような並びは、何かしらの資格だと分かる。
「ｈｕｎｔｉｎｇ（ハンティング）　ｌｉｃｅｎｓｅ（ライセンス）．　狩猟資格さ。これで剣も一発通過」
「え？　・・・・えぇぇぇぇぇぇぇ！！？」
「声が大きいって」
「ご、ごめん・・・」
周囲の視線の集中。
気恥ずかしくなったまどかが、真っ赤な顔を落とす。
「と、まぁ、まどかの心配は、気持ちだけありがとうってことさ」
「でも、なんかすごいよね。私と同い年なのに狩猟資格って」
「・・・まどか？」
ふと、まどかの表情が少し沈んでいた。
が、誤魔化すようにすぐ表情を戻す。
「え？　あ・・・ほ、ほら！　あれが見滝原中学校だよ」

まどかの指差す先には、一面ガラス張りの建物。
青い空をガラスが映し出し、まるで空模様の校舎と見違えるほどだ。
校門を通り抜け、改めてレミールが呟く。

「すごいな・・・。これが日本の学校か」

「レミールくん、職員室は分かる？」

「一階にあるってくらいは。まぁ、すぐ見つかるよ。これ以上、まどかに面倒かけられないし」

レミールはまどかに向き直って、手を握手の形で差し出す。

「案内してくれてありがとう。まどかがいなかったら遅刻してた」

「えへへ・・・。なんか、くすぐったいね」

照れながら、まどかも握手を返した。

ーーーーーーーーーーー

ガラス張りの壁が並ぶ、幾重の教室。
自分の教室に入っていったまどかを、一人の少女が呼びかける。

「お！　やっときたか、まどかぁー」

水色のショートカットの髪に、黄色のヘアピンが映える。
活発そうな顔立ちには、付き合いやすい雰囲気がある。
まどかは、その少女の名を呼んだ。

「おはよー、さやかちゃん」

「ねね、聞いた？」

「えっと、な、なに？」

「あ、悪い悪い。実はさ、うちのクラスに転校生と留学生が来るらしいって」

「え？　留学生って・・・」

まどかの頭に、レミールの顔が浮かぶ。
さやかには知る由もなく、話を続ける。

「転校生の方は、職員室からちょっと覗いたんだけどさ。腰に届くくらいの黒髪で、すげー美人だった。クールビューティって、ああいうのを言うんだろうなぁ」

「その、留学生の方は？」

「あ、男とか期待してるでしょ～」

「ち、違うよぉ！」

「けしからん！　そんな不純な子は・・・こうだぁ！」

さやかがまどかに抱きつき、脇と横腹をくすぐる。

「あはははは！　ちょ、さやかちゃん、やめ、えっはははははは！」

「まぁ、写真を流し見したけど、ありゃ女子だね。それも、とびきりレベルの高い」

「女子、か。あはは・・・」

真実を知るまどかには、苦笑いを浮かべることしか出来なかった。

ーーーーーーーーーー

ホームルームのチャイムが鳴り、少しして担任の教師がやってきた。栗色のボブカットに眼鏡の女性、早乙女和子という。

和子は声を荒らげていった。

「皆さん！　今日は先生から大事なお話があります！　卵焼きはスクランブルですか！？　それともだし巻き！？　はい！　中澤くん！」

突然、教師に差される哀れな男子、中澤くん。

「ええ！？　えっと、どっちでもよろしいかと・・・」

「そう！　その通り！　どっちでもよろしい！　いいですか女子の皆さん！　卵の焼き方にケチを付けるような男とは交際しないように！　そして男子の皆さんはそんな大人にならないように！」

和子は言い終えて、呼吸をひとつ。

「はい、それでは転校生と留学生を紹介します」

（『いやいやそっちが先だろう！？』）

クラス一同、内心で突っ込みを入れた。
「暁美さーん、レミールくーん」
先に入ったのは、転校生である黒髪の少女。
スレンダーな体躯に、艶やかな長い黒髪。
感情を抑えた顔つきが、クールな魅力を表していた。
クラスの一同が、少女への興味にざわつく。
そして次に、留学生であるレミールが入った。
レミールの神秘的な金髪と男子制服の男子が霞む、女性的な顔立ちにも、クラスがざわついた。
目が合ったまどかに微笑みかけ、まどかも小さく手を振る。
「うわぁ、留学生って男？　っていうか、あれで男ってあり？」
さやかが反則だと言いたげに、レミールを見て呟く。
その間に、転校生から自己紹介が始まる。
ホワイトボードに記した名前は、縦書きで「暁美ほむら」
「暁美ほむらです。よろしく」
ほむらは、たったそれだけで紹介を終えてしまう。
チラホラとした拍手と、気まずい空気が漂う教室。レミールは気にもせず、ほむらに尋ねる。
「いいのかい？　せっかくの自己紹介なのに、好き嫌いの主張も無しで」
「その必要はないわ」

「なるほど、ドライな人か」

空気を払うように、レミールは咳払いをひとつ。

ほむらと同じホワイトボードに、違う字で名を書き示す。

ホワイトボードの字は、横書きで「Ｌｅｍｙｒ（レミール）　Ｆｉｎｇｅｒｔｉｐｓ（フィンガーチップス）」

「レミール＝フィンガーチップス。日本には１０年近く前から興味があって、いてもたってもいられなくなった留学生でね。アイルランドの電気もガスもない所から来た、筋金入りの田舎者さ。皆とは、ファーストネームで呼び合うつもりだから、仲良くよろしく。ちなみに、女顔女声ですが正真正銘の男です。ボーイからのラブレターは、即刻シュレッダー行きをご理解ください」

陽気に冗談を交えて言い終えると、クラスから拍手喝采が返ってきた。

そんな中、ほむらは拍手に混じっているまどかに目を向けていた。

ーーーーーーーーーーーー

ホームルームが終わるやいなや、クラスの人間は、レミールかほむらのところに集まった。

「綺麗な金髪だね～」「本当に男なのかよ！？」「女子の制服着てみてよ～」「アイルランドってどんなとこ・・・」

エトセトラエトセトラ、レミールに降り注ぐ質問疑問要望感想雨あられ。

「いやあの、何で俺ばっかりに集まって・・・」

ほむらの方を見てみると、彼女にも数名の女子が集まっていた。
が、社交性の問題か、無駄な受け答えをしないほむらには、近寄りがたい雰囲気があるようだ。
と、ほむらが頭を抑えて席を立つ。
向かったのはまどかの席。
戸惑うまどか、淡々と話すほむら。会話の内容は聞こえない。

（やっぱり、ほむらから魔力を感じる。彼女は・・・）

周囲の生徒の声も通らず、レミールは考える。
丁度、まどかが席を立ち、ほむらと教室を出る。

（ほむらの体調不良は、多分仮病だ。まどかに・・・、まどかのような存在に話がある？）

ーーーーーーーーーーー

壁一面ガラス張りの渡り廊下を、ほむらが先頭に歩く。
それを、まどかが気まずげに続く。
あまりに会話がなかったせいか、耐え切れず口を開く。

「・・・あの、暁美、さん？」

「ほむらでいいわ」

名前で呼べ。という切り返しは予想外だったせいか、更に戸惑ってしまう。

「えっと、あの、かっこいい名前だよね。こう、燃え上がれーって感じで」

まどかから見えない、ほむらの口が噛み締める。
そして、綺麗な振り返り。体育の授業では見本になりそうなそれ。

「鹿目まどか。あなたは、家族や友達のことを大切に思ってる？」

突拍子な質問。
まどかは呼吸ひとつおいて、はっきり答えた。

「・・・もちろん、大切に思ってるよ。家族も、友達も、みんな大好き」

「・・・そう。なら、忠告しておくわ。その気持が本当なら、今とは違う自分になろうとは思わないで。・・・でないと、あなたはすべてを失う」

「え・・・？」

素頓狂な反応しかできないまどかに、ほむらは背を向けようと。

「面白い事言うね、ほむら」

声がひとつ。
廊下を歩く足音ひとつ。
その主は、レミールだった。
ほむらは睨むように振り返る。
その呼び名は、お前のものではない。と言いたげに。

「自己紹介したじゃないか、ファーストネームで呼び合うって」

ほむらは諦めたようにため息一つ。そして、レミールを無かった事にして、振り返って。
またひとつ、かかる声。

「君は、その魔力で何を知った？」

またも、ほむらは振り返る。
次に浮かんだのは、驚愕の顔だった。
そして、吐き捨てるように一言返す。

「あなたに、何がわかる」

それだけ言って、歩き出す。
もう、振り返らないと言わんばかりに。
その背中に、レミールは答え返した。

「わからないから、尋ねてるのさ」

ほむらは、一瞬だけ歩を止めた。

1，friendly&unfriendly（後書き）

スクランブルエッグと出し巻きの比較に無理しか感じられない。
ちなみに、フィンガーチップスって苗字はまぼろし劇場からお借りしました。
まぼろし劇場積みゲーでしたけどね。

レミールが女性にしか見えない表現をしているのは、私がミスティックアークをプレイした時、ステータスの顔グラが女にしか見えず「性別選択間違った？」と、勘違いしたのは、いい思い出だからです。

ちなみに私は英語苦手です。

※修正加えました
ほむらの体調不良は、多分仮病（アクション）だ。→ほむらの体調不良は、多分仮病（ブラフ）だ。

2，CDって何？（前書き）

こんなタイトルしか浮かばなかった・・・。

2，CDって何？

沈みへと傾き始めた日の頃合い。
放課後となった今、レミールはまどかやさやかとカフェで、談笑に花を咲かせる。
フライドポテトをつまみながら、さやかがしみじみ言う。

「しっかしまぁ、留学生くんとまどかがお友達とは、世間は狭いもんですなぁ」

「えへへ。最初はなんだか、話しかけてもいいのかなって雰囲気なんだけど、話すと気さくな感じだったから」

「あ、わかるわー。転校生とは別の意味で近寄りがたいよねぇ」

「そうなのか？　でも、何処が近寄りがたい難いんだろうか？」

レミールの疑問に、まどかとさやかは見合って、小さく笑った。

「いやさ、レミールってなんか神々しい気配があるんだよねぇ」

「一目見てね、なんか、こう、女神様って感じがしたの」

「男に女神って・・・。というより、ぜんぜん近寄られたのですが？　主にクラスの方々に」

レミールがジト目で睨むと、まどかとさやかは、吹き出したように笑った。

と、さやかが思い出したかのように言う。

「そういやさ、まどか。留学生くんでうやむやになったけど、転校生にガン飛ばされてなかった？」

「え！？　えーっと・・・そう、だった、の？」

「気付いてなかったのかよ！　ま、レミールのインパクトのが強かったしねぇ」

「もう俺の話は置いとこうよ・・・。でも、意味深なこと言ってたね。まどかが違う自分になれば、すべてを失うとか」

「もしかして、保健室に案内したとき？　くぅ～！　才色兼備なクールフェイズと思いきや、まさか意外な電波キャラ！　あれが最近の萌えとでも言うつもりかぁ！」

「対抗ってわけわかんないよ、さやかちゃん」

苦笑いしたまどかは、レミールの表情が考え込んだものになったことに気付く。

唇を人差し指で叩くそれは、どことなく楽しげにも見えた。

「レミールくん？」

「・・・ん？　ああ、すまない。改めて、ほむらについて気になってね」

「何？　あ、ひょっとしてタイプとか！」

さやかのそれを、軽く笑って聞き流す。

「ハハ。でも、ただの電波と扱うには、少し具体的すぎる言葉だったからね」

「レミールってば、転校生の話を信じちゃう気!?」

「なるほど、さやかは不信派か。まどかはどうかな?」

「うーん・・・わかんない、かな。嘘って感じじゃないんだけど、ちょっと唐突すぎるし・・・」

「中立、か。その方が、意見交換のしがい出てくる。さて、俺が興味を持つ理由を説明しようか」

思わず、授業のように身構えるまどかとさやかに、レミールはほぐすように笑う。

「そう畏まらないでよ。・・・さて、俺がポイントとしている部分は、保健室の場所だ。まどか、ほむらに保健室の場所は教えてないんだよね?」

「あ、うん。でも、ほむらちゃんは知ってたみたい」

「そう、それだ。転校生であるほむらには、正確な保健室の場所を知るはずがないんだ」

「えっと、どういうこと?」

いまいち把握しきれないさやかに、レミールは鞄からパンフレット

を取り出す。
表紙には、「見滝原中学校」とある。
「3月の時点で手に入るものだよ。多分、入院していたほむらも同じ物を持ってる。校内の案内図を見てみなよ。保健室はどこにある？」
「えっと、東校舎一階の一番端の方に・・・」
「あっ！」
突然、まどかが気付いたような声を上げた。
レミールは、楽しげな笑みを浮かべる。
「うんうん。それじゃまどか、実際の保健室は？」
「西校舎、一階。渡り廊下の一番近く・・・。たしか3月の終わり、部屋の老朽化で保健室を変えたって聞いた」
「保健委員のまどかには、保健室の変更が伝わっていた。ほむらにとっては、案内図と違う場所。だというのに、ほむらはまどかの先を歩いていた。入院していた状態、パンフレットの案内図しか、校内を知るすべが無いのに、ね」
「・・・あ！　いや、でもでも、先生に聞いたとか」
「さやかは期待を裏切らないねぇ。俺が望んだ通りの反論だよ」
愉快と言わんばかりに、レミールは言う。

「担任でないにしろ、もし先生に聞いたとすれば、その先生はこう思うだろう。転校生がいきなり保健室なんか聞いて、サボるつもりか。と、印象に残る。で、俺が職員室に来た時、転校生の印象をこう聞いた。最低限の挨拶しかしない、無口な生徒だ。とね。対する俺は、正反対に社交的だと比較されたよ」

「な、なるほど・・・。って、それじゃ、レミールはいつ保健室の場所を知ったのさ？」

「俺は昼休みの内に調べたんだ。パンフレットの地図は、頭に入ってたからね。東校舎にある二年の教室から、渡り廊下を使って保健室ってのは、ちょっと疑問だったからさ。でだ、まどかに対する知ったような物言いと、保健室の位置を既知。これじゃあ、まるで・・・」

言葉を溜めるレミールに、二人は思わず固唾を呑む。

「実際、体験してきた。・・・未来から来たみたいだ」

「って、オチも電波かよ！？」

さやかのツッコミと同時に、カフェ内の鳩時計が鳴り響く。
時刻は5時と長針が半分回りきっていた。
それを見て、まどかが声を上げた。

「いけない、そろそろ帰らないと」

「確かに、そろそろ一般的な門限が近いね」

それぞれが、菓子や飲み物のトレイを持ち上げる。

と、さやかが思い出したかのように言った。
「そうだ、帰りにＣＤ屋寄ってもいい？」
「いいよ、また上条くんの？」
「あはは、まぁ、ね」
照れながら頭を掻くさやか。その様子に、まどかは微笑む。
と、レミールが手を上げた。
二人の注目が集まる。
「ＣＤって、なに？」
『・・・え？』
予想外すぎる質問に、二人の反応が重なった。
ー－－－－－－－－－－－－
近未来的な内装。多種多様のパッケージとヘッドホンが並ぶ、ＣＤショップ。
まどかが、サンプルＣＤのパッケージを開けてみせる。
「レミールくん、これがＣＤ。この中にいろいろな曲が入るんだよ。これはサンプルだから、２、３曲ぐらいだけど」
「へぇ、何分くらい？」
「ええっと、少なくても８分かな？　買ったＣＤだと、全曲で一時

間くらいはあるよ」

「そんなに！？　こんな小さい物に、レコードの二倍近く入るなんて・・・。学校といい街といい、最近の技術はすごいなぁ」

「ＣＤはむしろ古いけどね・・・」

さやかのツッコミなど、ＣＤの興味で埋め尽くされたレミールに届くはずもなかった。

「あ、さやかちゃん。レミールくんは私が見てるから、上条くんのＣＤを選んできなよ」

「いいの？　じゃ、お言葉に甘えまして」

さやかが別のＣＤコーナーに移ると、レミールが尋ねた。

「さっきも言ってたけど、上条って？」

「上条恭介くん。バイオリンが上手な、さやかちゃんの幼馴染だよ。今事故で病院に入院してるから、好きなクラシックのＣＤを買いに来てるんだって」

と、そこまで言って、まどかが耳打ちする。

「さやかちゃんは、上条くんのこと好きらしいよ」

「なるほど。恭介に知り合ったら、さり気なく応援しておくよ」

「ウェヒヒヒ」「ほっほっほっほっ」

企むように二人は、特徴的に笑い合う。
と、まどかの耳に。否、頭に直接響く声がひとつ。
（・・・タスケテ・・・タス・・ケ・・・テ）
「だれ？　どこなの？」
「まどか？　いったいどうした？」
レミールの声が聞こえてないのか、まどかは頬りにあたりを見渡す。
（タスケテ・・・まどか・・・！）
「呼んでる・・・！」
自分の名前に確信したように、まどかは走りだす。
「まどか！？　ちっ！　なんだっていったい・・・！」
いい予感のしないレミールも、床の鞄に立て掛けた長物、布袋の長剣だけを手に、まどかを追って駆け出す。
が、レミールの足は早い。日の傾いた歩道、簡単にレミールがまどかの横に並ぶ。
「レミールくん！？」
「いきなり走りだして、びっくりしたよ。財布でも落とした？」
あえて軽口を叩いて、緊張を解す。

まどかは、叫ぶように言った。

「頭に、声が聞こえたの！　助けてって声が！」

「頭に、声・・・？」

レミールは、速度を保ったまま、考えこむ。

（緊急に助けを求めるテレパシー、か。だが、助けなら俺にも聞こえていいはずだ。・・・まどかだけを呼んだ。ちっ、魔力関連か・・・？）

「とにかくこっち！　急がないと！」

まどかが走るスピードを上げる。

レミールも、毒づく思考を振り払って、それに続いた。

ーーーーーーーーーーーー

たどり着いたのは、建設途中のビルだった。

夕日を背後に取った姿は、何か得体のしれないものの潜む。そんな錯覚にとらわれる。

緊張にこわばった体、ドアを開けようと伸びる、まどかの手。

それを、レミールはそっと制す。

「レミールくん・・・？」

「女の子を前に出しちゃ、男の恥さ。心まで女っぽくなりたくないんでね」

軽口に、まどかに自然と笑みが浮かぶ。

「ふふっ！　・・・うん、ちょっと楽になった。ありがとね、レミールくん」

「軽口でよけりゃ、安いもんさ」

言って、ドアを押し開く。
中は薄暗く奥の方は闇で見渡せない。床には木片やロープ、ドラム缶と、様々。

「さて、杞憂なら歓迎なんだが」

言って、レミールの後ろを離れず、まどかが続く。
いくらか歩いた所で、レミールが立ち止まる。
その目が指すは、天井の通気口。
金網で塞がってはいるが、人一人ならゆうに通れる大きさだ。

「レミールくん、どうしたの？」

「しっ！　・・・通気口から、足音みたいな音が聞こえた。・・・しかも、近付いてる」

人差し指を唇に当てたレミールに、押し黙るまどか。
まどかを背に庇い、布袋から長剣の柄だけをむき出す。
いつでも刃を抜ける体制の中、金網を壊して通気口から現る影。
床に打ち付けられ、ぐったりと息をするそれは、白い獣だった。
イタチの体、猫の頭、耳から生える長い耳。
白い体毛のあちこちに浮かぶ、鮮血の傷。
警戒を解いたレミール、すぐに白い獣に駆け寄ったまどか。

そして、現れるように居た後ろの人物に、レミールは声をかける。
「動物虐待が趣味なのかな？　とても精神病患者には見えないんだけどね、ほむら」
軽口に振り返った先、まどかも同じく向く。
そこにいたのは転校生、暁美ほむらだった。
ただ、その服は見滝原中学校のそれではない。
濃い紫と灰色の生地の、近代的なセーラー服を思わせるそれ。
左には円盾、そして何より右手の拳銃に存在感があった。
「そいつを渡して、まどか」
レミールを無視して、ほむらは言う。
「ほむらちゃんがやったの？　だめだよ！　こんなこと・・・！」
「鹿目まどか、あなたには関係ない」
「それはちょっと、乱暴な決めつけかな」
レミールが割って入り、ほむらの前に立つ。
答えたのは言葉ではなく行動。
何の躊躇いなく、銃口をレミールに向けた。
「ほむらちゃん！　どうして・・・！」
「これはまた、物騒な御返事だこと」
ほむらは言葉で答えず、銃口を床のドラム缶へ。

響く銃声、転がるドラム缶。それは、レミールの足元へ。
恐怖にうずくまるまどか、表情に緊張をみせるレミール。

「まどかは、できるだけ傷づけたくない。でも、あなたなら容赦しない」

銃口ではなく、冷たい声色を向けて、ほむらは続ける。

「まどかを連れて、そいつを置いていきなさい。でなければ、怪我では済まないわ」

「怪我では済まない、か。怖いけど、お断り、だ！」

声を強く、ドラム缶を蹴り飛ばす。
吹き飛んだそれは、身構えるほむらの横をすり抜け、柱に激突。
くの字にへこんだドラム缶が、薄暗に金属音を響かせる。
ほむらは憎々しげに、レミールを睨む。

「抵抗、するつもり？」

「怪我では済まない。そう言ったね」

「レミールくん、やめて！　喧嘩、しないで・・・！」

震えた声のまどかに、レミールは一瞥だけ。
そして、ため息一つ置いて言う。

「その言葉、そっくり返すよ」

こんどは、呼吸ひとつおいて、一一一唱えた。

「――ファイヤー」

空気が呼応して、蹴り飛ばしたドラム缶を一瞬で炎に包む。
僅かな火の粉を床に残し、ドラム缶は消し炭と崩れた。
それは、いわゆるおとぎ話の魔法のように見えた。
まどかは呆気に。ほむらは表情を崩すまいとしているが、顔の動揺を隠し切れない。

「魔法少女には、見えないわ」

「そりゃ、少女は不正解だもの。でも、世界は広いんだ。魔法剣士くらいは、いるんじゃないかな？」

「そんなものは、お伽話だけよ」

「『お伽話の世界』は、もっとファンシーでリアリティに欠けてたよ。魔法少女も同じものだと思うけど？」

「話はお終い。・・・退くなら、最後のチャンスよ」

「もちろん退くさ。・・・三人で、ね。さやかッ！」

レミールの合図に、ほむらを襲う白煙。
煙のもとである消化器、それを構えるさやか。

「まどか！　レミール！　こっち！」

さやかの合図に、レミールはまどかの手を引き、駆け抜ける。
消化器を投げ捨て、さやかもそれに続いた。

煙に視界を塞がれたほむらが、手を掲げる。
と、一瞬で白煙が吹き飛んだ。が、そこには誰も居なかった。
ーーーーーーーーーー
薄暗い廊下を駆け抜ける三人。
レミールがうれしそうにさやかに言った。
「ドラム缶に火の粉、通じたみたいだな！」
「やっぱりあれ、合図だった！？」
「ああ、ナイスだ！」
「えっと・・・え？」
わからないまどかが、思わず声を漏らす。
「俺が蹴り飛ばしたドラム缶は、外のさやかに位置を伝えた。炎から残った火の粉は、暗闇でも位置を伝えるためさ。俺だって、喧嘩は好きじゃない」
「レミールくん・・・！」
嬉しさに目を輝かすまどか。
そして、さやかが叫ぶように言う。
「しっかし、何なのさ！　あの転校生、電波の次は通り魔かよ！て言うか、まどかのそれ何！？　猫！？　イタチ！？」

「わかんないよ！　けど、怪我してるし・・・。放っておけないよ！」

「二人とも！　ストップ！」

レミールの声に、駆けた足を止める。
息を切らせながら、さやかが尋ねた。

「な、なにやってんの！　早く逃げないと！」

「落ち着いてくれよ。・・・周り、見てみろ」

レミールに従い、周囲を見渡す。殺風景な建物の廊下が、徐々に変わる。
工事現場で扱う用具を、無理矢理つなぎ合わせた空間。
建物内にもかかわらず、遠くに見える、張りぼての街景色。
綿毛に立派な髭をたくわえたそれが、バケツリレーに綿を運ぶ光景。
異常としか受け取れないそれに、レミールは身構え、まどかとさやかは恐怖を表す。

「なんとまぁ、嫌な予感がひしひしと・・・！」

「な、何よ、これ・・・」

「わ、わかんないよ・・・。ッ！　さやかちゃん！　後ろ！」

「え？」

振り向いた先には、綿毛の怪物。
葉の部分を刃に変え、首を狙う。表情のない綿毛が、獲物に舌なめ

ずりするように笑った。そんな錯覚のまま、さやかの首を狙う刃が・・・。
ガキンッ！　と、金属音に弾かれた。
怪物の刃を弾いたそれは、鋼の長剣。
それを振るうは、レミール。
それを気に入らずか、怪物はレミールに狙いを変える。
刃の葉を構え、飛びかかった。

「レミールくん！」「レミール！」

まどかとさやかが叫ぶ。
怪物を目前にレミールは、その口をつり上げる。
そして、刹那を思わせる、剣の一振り。
怪物を愚者と扱うかの如く、容易く斬り捨てた。

「レミールくん、すごい・・・！」

「ぜんぜん、見えなかった・・・」

感嘆を述べる二人に、レミールが言う。

「思わず斬っちゃったけど、誰かのペットかな？　後で賠償請求はイヤだなぁ」

「いやいやいや！　こんな凶悪なペットいないから！」

「いやでも、俺は都会に疎いし、こういうブームとかあったり？」

「え、えっと、多分植物？　だから、ペットじゃないと思う、けど・・・」

「って！　何でまどかは真面目に答えるかなぁ！」

「ハハ、さて、空気も和んだし、冗談はここまでかな」

レミールは、周りを見渡す。
目前を埋め尽くす綿毛の怪物は、ゆっくりだが確実に近付いている。

「悪いけど、せっかく出来た友人達なんだ。今日の今日で、傷付けさせる訳にはいかないなぁ」

不敵に笑い、剣を構え、柄を握り直す。

「相手は、この世に似合わぬ化け物共。ここは一つ、『生前』を思い出してみますか、ね！」

力強く言い放ち、怪物の群れに踏み込んだ。

2，CDって何？（後書き）

今更、ハンティングライセンスで刀剣所持許可って無理があるように思えてきた。何を今更。

保健室の話は完全オリジナルです。いわゆる裏付けです。

カフェでの何気ない会話は微々たるものですが、こういう小さな要素がいざ本番の信ぴょう性に足るのではないかと。何を言ってるんでしょうね？

まどかの「ウェヒヒヒ」はおなじみでしょう。レミールの「ほっほっほっほっ」は、『闇』から借りてきました。

あ、さやかってツッコミさせると安定しますね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9437x/

ミスティック☆マギカ　－母を訪ねて見滝原－

2011年10月28日17時16分発行